

■イベント

## 超豪華版！秋の散歩 「菱田春草展」

牧内雪彦（中47回・高1回）

秋。静かな秋。もの思う秋。美術の秋。

今年の秋は菱田春草の生誕140周年とあって、東京国立近代美術館（千代田区北の丸公園）が超豪華な春草回顧展を開催しています。国の重要文化財「黒き猫」「落葉」「王昭君」「賢首菩薩」の4点を勢揃いさせるほか、100点を超える名作を集合するというのですから、超豪華と言わざるを得ません。もしかすると私たちの世代では今後もう二度と観られない稀有の展覧会かもしれませぬ。

私たち郷土、伊那谷飯田の大きな誇りである菱田春草の作品を東京で鑑賞し、深い静かな感動を味わう至福のひとつときにお誘い致します。近代日本画巨匠は数多けれども、春草は格別に優れた感性と技術を持った秀才画家だったと確信するからです。

ナンテタッタ春草は素晴らしいですぞっ！



菱田春草展のリーフレット

明治七年九月誕生。生家は長野県下伊那郡飯田町仲ノ町三百五番地で、父鉛治、母くら、長兄瀬平、次兄為吉、姉きわ、三男治（春草）、妹よし、弟唯蔵、妹準の九人家族。幼いころの春草はかなりの腕白坊主だったので、弟や妹の友だちは春草が家にいると怖がって寄り付かなかったそうです。

明治十三年に「飯田学校」（現在飯田市立追手町小学校）へ入学。小学高等科時代に赴任し担任になった中村先生（後の洋画家・中村不折）は次のように春草少年を回顧しています。「まあどの学科もよく出来る生徒ではあったが、とても理屈っぽくて教師らを困らせることが多かった。絵の素質がいいから絵をやれと勧めたが、彼は頑固に首をふって俺らは法律家になる！と力んでいた」と。

## 春草誕生地公園が……

飯田市仲之町なかのまちは、城下町飯田の在りし日の武家屋敷町の雰囲気を、面影を、僅かながらも偲ばせる静かな通りです。銀座通りから眼鏡橋をわたって伝馬町に歩を進めると、右手に喜久水酒造があり、此処を右折すると仲之町になります。およそ二百メートルほど行つた突き当りの左手一画が菱田家の屋敷跡。

ここに今年度内（平成27年3月末まで）に必ず完成予定という『菱田春草生誕地記念公園』の設立工事が始まっているそうです。

仲之町の名前の由来は、同じ武家屋敷町の馬場町ばばのまちと江戸町の間にあるから仲之町だと語り伝えられ、この歴史ある町名の地元、橋北地区の人々が長年の念願と熱意で遂に実現の道を開いた『菱田春草生誕地記念公園』ですから、大変喜ばしく、完成の日が待たれます。

皆さん、飯田市美術館の前庭に立っている横山大観揮毫「菱田春草誕生之地」の大きな碑をご存知でしょうか。これは飯田美術館の竣工とともに他所から移転設置され、巨木安富桜と「青雲」の碑（飯田中学校校跡碑）と並んで三幅対をなし、飯田美術館前庭の風格をより高めております。これはこれで結構ことですが、

しかし、目下工事中の仲之町「菱田春草生誕地記念公園」が完成すると、此処こそ正真正銘の『菱田春草誕生之地』であります。もちろん横山大観の揮毫そのまま原寸文字を彫って新しい碑の建立が確定しているそうです。

## 「黒き猫」の神秘性を……

さて本題のお誘い「菱田春草展」は東京国立近代美術館で九月二十三日（火・祝日）から十一月三日（月・祝日）までの開催。この初日の九月二十三日は春草140年目の誕生日の翌々日であり、さらに九月十六日という春草享年三十六の祥月命日を思い合わせると、「初秋九月は春草の月」なんて一句？が念頭をよぎります。

空前絶後ともいえそうな今回の豪華展覧会。先に重文指定の四作品が揃い踏みと記しましたが、新しいリーフレットをよく読んで見ると重文『落葉』と「黒き猫」だけは同時展示ではなく、前半・後半に分けての展示でした。したがって、両方を観るためには再度足を運ぶよう覚悟しましょう。

『落葉』は六曲一双の屏風一杯に深まる秋の林を描いたもので、恐ろしいほどの静寂が心に響きます。東山魁夷は「春草随感」で『落葉』について次のように述べています。



黒き猫(重要文化財)1910(明治43年) 永青文庫所蔵

「この、一見写実に徹した画面は、春草その人の魂を最も率直に表出している。いわば、春草はこの作品を描くことによって(偉大な指導者岡倉天心からも、偉大な友人横山大観からも離れて——)初めて真実の自己の内奥を覗き見る発見をしたのではなからうか」と。

これは東山魁夷が昭和三十四年十月、信濃教育会機関誌「信濃教育」の特集「菱田春草」に寄せた随筆で、画家の制作心理に深い洞察が示されており、下手な美術評論よりもはるかに印象が強くて私は記憶しています。

『黒き猫』は『落葉』の翌年の作で、縦長の画面に柏の黄葉と幹にうづくまる黒猫が描かれている。黒猫の眼

は異様な神秘性を湛えて光り、柏の葉には金泥が使われているので、金と黒とのみごとな諧調が『落葉』よりも更に装飾の輝きと静謐を感じさせます。

### 飯田からは『菊慈童』など

ところで、ふるさと飯田からはどんな作品が来京するのでしょうか。飯田市美術博物館に伺ってみました。すると明朗なお答えで、

「当館所蔵の作品からは次の五点の貸出が確定しており、なお春草会所蔵の『白き猫』が加わるので合わせて六作品が東京へ出張することになります」

美博からの出張五作品は制作年代順に並べて次のように知らせて下さった。『菊慈童』『靈昭女』『鹿』『夕の森』『春秋』です。

若き日の名作『菊慈童』が飯田市民の寄金運動に大きく支えられ、飯田市の所蔵となったのは平成十四年頃。この名画取得のため市民運動を起こして莫大な募金に成功した話題は広く知られています。明治三十三年、春草



春秋（双幅）1910（明治43）年 飯田市美術博物館所蔵

二十七歳の作。古代説話から出た同じ画題を横山大観も安田靫彦も描いているけれど、春草の感性と精神性の秀逸が、はっきりと構図に表われているので驚かされます。

『春秋』は春草晩年の作で二幅対。大きな八つ手の葉下に、くま笹の根元であそぶイタチを配して春幅とし、秋幅は散りはじめた二本の楓に一羽の山鳩を描いて秋の風情を表現しています。そのイタチと山鳩の精妙な描写に魅せられ感嘆したことが今も忘れられません。あれは確か春草生誕120周年の記念に飯田市美術博物館の春草記念室でおこなわれた展覧会でした。だから今から丁度二十年の昔になりますが、当時約四億円とかで飯田市が購入した『春秋』の、あれが初披露、初公開だったことも思い出しました。

### 絵との対話を楽しもう

飯田で見ても東京で見ても作品に変わりはないでしょうが、出張の展覧会場が変われば雰囲気や人間の鑑賞感覚にも変わった発見があるかも知れません。それも今回の春草回顧展の楽しみの一つだろうと思います。

去年の秋は春草の師・岡倉天心の生誕150年と没後100年を記念して、福井県立美術館（天心の父は福井藩士で横浜貿易を担当し大活躍）が超豪華な展覧会を企



菊慈童 1900(明治33)年 飯田市美術博物館所蔵

表的作例にあげられる『菊慈童』でした。明治時代のジャーナリストは、殊に美術記者には「褒める・貶なす」のほかに論評の能が無かったのかも知れません。

「景に比して人物が小さ過ぎる」という批判も、実は深山幽谷の中に数百年も生き続ける慈童の凄絶な孤独を描写するために、春草が熟慮の構図だったと解釈理解するなら、この作品に一層の親しみが湧くと思います。

菱田春草展へのお誘い、長ったらしい駄文になったことお詫び致します。

## おわりに

画開催しました。このとき飯田市美術博物館が春草作品の貸出をしたのは『菊慈童』『夕の森』『夜桜』の三点でした。どうやら『菊慈童』は話題の多い作品として人気が高く引張り舐めようですが、飯田市の所蔵になってから、東京への出張展覧は今回が初めてだそうです。

「菊は付合わせに少々だけ。満山ことごとく紅葉も、その色彩の異様な汚さ。景に比して人物が小さ過ぎる。童子に想を現す余地がなかったのか。景色に遠近感なく見苦しい。溪流と岩石が浮いてるように見える！」等々意地悪な新聞報道や、朦朧体などと揶揄嘲弄を受けた代

私ども在京の同窓有志が、春と秋の恒例にしている『東京の飯田を歩く会』は、今秋にかぎって「歩く会」から「春草展を観る会」に転換を予定しています。日程も集合場所も未定ですが、例えば東京駅に集合、歩いて国立近代美術館。春草展鑑賞の後、歩いてその近辺で、いつもの楽しい打ち上げ懇親会！ なーんて、こんな案も出ておりますので、ご期待ください。